

幼児の母親・保育者に対する認知と社会性の発達との関連

園田菜摘

Young Children's Cognition of Mothers and Teachers and Their Social Development Natsumi Sonoda

問題

これまで多くの研究で、母親、父親など養育者の養育態度が幼児の社会性の発達に関連することが示されている。例えば、母親の養育態度が受容的な場合、幼児の情動調整能力が高いこと(小林, 1997)、母親が他者志向的な理由づけは幼児の向社会的行動を動機付けること(首藤, 1985)などが示されている。このように、養育者が関わりの中でどのような養育態度を取るかは、日常的な相互作用の中で幼児に直接影響を与え、幼児の社会性の発達に影響すると考えられる。しかし、これらの研究では養育者は一方的な影響の与え手であり、幼児はその影響を受けるのみ、といった側面ではしか見ておらず、幼児が養育者の養育態度をどのように解釈しているか、といった幼児側の視点が欠けている。

一方、愛着研究においては、子どもの発達早期に形成される愛着の安定性といった関係性の質が、社会性の発達に関連することが多くの研究で指摘されている(園田・北村・遠藤, 2005 参照)。子どもは養育者に対する愛着の形成を通して、特定の他者への近接可能性に対する見通しや基本的信頼感を獲得し、社会性の基盤を身に付けていくと考えられている。しかし愛着においては、子どもが保護や支援を必要とする時に愛着の対象である養育者がそれに応じてくれるかについての内的作業モデルが中核の概念

であり、子どもが特に保護や支援を必要としない日常的な場面での養育者の養育態度を子どもがどのように解釈しているか、といった側面は捉えづらいものとなっている。

幼児と養育者との関係性の別の指標として、養育者の養育態度を幼児が認知的にどのように捉えているか測定するCCP(Children's Cognition of Parent)やCCT(Children's Cognition of Teacher)の尺度が開発されている(後浜, 1978; 森下, 1985)。これらの尺度では、幼児が養育者に対して親和性や手助けを求める場面において、親や保育者がどのように反応するかを幼児にイメージさせ、その回答から養育者を受容的と認知しているか、拒否的と認知しているかを評定する。幼児を対象としたこれまでの研究では、母親を拒否的と認知している男児は母親の攻撃行動のモデリングが少ないこと(森下, 1990)、保育者を拒否的であると認知している男児は保育者の攻撃行動のモデリングが多く、保育者を受容的であると認知している女児は愛他行動のモデリングが多いこと(森下, 1985)など、幼児の養育者への認知がモデリング行動に影響することが指摘されている。

養育者への認知がモデリング行動に影響する理由として、モデルの行動に対する幼児の観察学習はモデルへの同一視によって成立するため(Bnadura & Huston, 1961)、幼児がモデルとの関係性をどのように捉え

ているかが重要であると考えられている(後浜, 1978)。このことは、養育者の養育態度そのものよりも、それを幼児がどのように認知しているかの方が幼児の発達に影響しやすいことを示唆しているが、モデリング以外の幼児の発達についてはこれまで検討されてきておらず、幼児の認知の影響については不明な点が多い。また、母親や保育者は幼児にとって重要な養育者であると考えられるが、それぞれの養育者に対する幼児の認知はこれまで別々に検討されており、同一の幼児の母親への認知、保育者への認知が幼児の発達に相互にどのように関連し合うのかは明らかになっていない。

そこで本研究では、幼児の母親、保育者それぞれに対する認知が社会性の発達にどのように関連するかを明らかにすることを目的とする。

方 法

<調査対象>

公立幼稚園に在籍する年長児 1 クラスの幼児 29 名(男児 13 名、女児 16 名)と年中児 1 クラスの幼児 27 名(男児 12 名、女児 15 名)とその担任保育者(女性)2 名を対象とした。

<調査手続き>

(1) 幼児の母親・保育者への認知の測定

幼児が母親、保育者への認知を測定するため、幼稚園の 1 室で幼児 1 人 1 人に対する面接調査を行った。

面接での質問項目は、幼児の母親への認知を測定する CCP(Children's Cognition of Parent)尺度(後浜, 1987)と保育者への認知を測定する CCT(Children's Cognition of Teacher)尺度(森下, 1985)を

用いた。それぞれの尺度は、小学生用の測定尺度(林・一谷・小嶋, 1973)の項目の内、援助欲求場面 4 項目と親和欲求場面 4 項目の計 8 項目について幼児の生活場面に合うように作成された尺度である。なお、本研究では CCP 尺度の 1 項目である『ホッチキス貸して』と言うとお母さん(ママ)は何と言いますか?』という内容を家庭場面に合うように『これ買って』と言うとお母さん(ママ)は何と言いますか?』と修正を加えた。

幼児への質問用に男児用と女児用の 2 種類の絵カードを作成し、例えば「(絵に描かれている子どもを指さしながら) ○○くん／ちゃんが『上手にできなかった』と言うと、(絵に描かれている母親／保育者を指さしながら) お母さん(ママ)／××先生は何と言いますか」と質問し、子どもの回答を記録用紙に記入した。以下、それぞれ 7 項目について同様に行った。質問順序は 2 通り作成し、援助欲求場面と親和欲求場面が交互になるようにした。CCP 尺度と CCT 尺度の内容は類似しているため、それぞれの質問順序が同一にならないようにし、提示順序は CCP 尺度を先に行う場合と CCT 尺度を先に行う場合でカウンターバランスを行った。また、CCP 尺度と CCT 尺度を続けて行わないよう、それぞれの尺度の間に 10 分程度かかる別の課題を挟んだ。絵カードは各項目に 1 枚ずつ作成し、子どもの回答が絵カードに描かれている人物の表情に左右されないよう、無表情とした。

CCP 尺度と CCT 尺度の評点は、小学生用の測定尺度の評点方法(林・一谷・小嶋, 1987)の定義に従い、それぞれの項目に対する子どもの反応語について「受容」「拒否」

「その他」に分類した。CCP 尺度、CCT 尺度それぞれについて、受容的な反応語の数を受容得点（0～8 点）、拒否的な反応語の数を拒否得点（0～8 点）とした。まず第 1 評定者が全ての子どもについて評定し、次にランダムに選んだ 15 名（30%）の子どもについて第 2 評定者が独立して評定を行った。評定者間の一致率は $\kappa = .64$ 以上だった。なお、全ての項目に「わからない」と回答した子ども 1 名（女児）のデータは以降の分析から除外した。

②幼児の社会性の測定

幼児の社会性を調べるために、幼児の援助行動、向社会的行動、社会的行動それぞれについて測定を行った。

①援助行動：幼児の他者に対する援助行動の有無を測定するために、岩立(1995)を参考に実験を行った。まず、別の課題を行うという理由で幼児を 1 人 1 人幼稚園の 1 室に呼び、課題を行う前に包帯を右手に人差し指に巻いた調

査者が苦痛を示し、指を怪我していることを幼児に伝えておいた。その後、一通りの課題を行った後で、「これで終わりです」と幼児に伝えたとこで、調査者が苦痛を示して机の上の筆箱をわざと落とし、子どもの反応を観察した。30 秒以内に子どもが自発的に床に散乱した鉛筆を拾った場合には、援助行動として 1 点を与えた。

②向社会的行動：幼児の向社会的行動を測定するために、樟本・山崎(2002)の幼児の向社会的行動尺度を用い、担任保育者に評定してもらった。評定は、「非常によくみられる(5 点)」から「全くみられない(1 点)」までの 5 段階とした。主成分分析を行ったところ(Table1)、全ての項目が 1 つにまとまったため、それぞれの項目の得点を合計し、向社会的行動とした。 α 係数は、 $\alpha = .94$ だった。

Table1. 向社会的行動の成分負荷量

質問項目	成分負荷量
3. 様子を見て助けてあげる	.905
1. 困っている子どもにやさしくする	.901
4. 自ら他児の面倒をみる	.894
6. 困ったり、悲しんでいる人の様子を見て声をかける	.886
7. 相手の身体などのハンディに気づき、自然に助ける	.869
5. わからないでいる他児に教える	.847
2. 他児にトラブルがあると、気づかわしげにみる	.648

③社会的行動：幼児の社会的行動を測定するために、柴田(1993)の社会的コンピテンス尺度を用い、担任保育者に評定してもらった。評定は、「あてはまる(5

点)」から「あてはまらない(1 点)」までの 5 段階とした。柴田(1993)の作成した下位尺度に基づき、逆転項目を逆転させた上で、「協調／攻撃」の 6 項

目を合計して「攻撃行動」とし、「参加／撤退」の6項目を合計して「撤退行動」とし、「主導性」の4項目を合計して「主導的行動」とし、「対大人関係」の4項目を合計して「対大人行動」とした。それぞれの下位尺度の α 係数は、「攻撃行動」は $\alpha=.92$ 、「撤退行動」は $\alpha=.77$ 、「主導的行動」は $\alpha=.88$ 、「対大人行動」は $\alpha=.62$ だった。

結 果

(1) 幼児の性別、年齢クラスとの関連

幼児の性別と年齢クラスによって、母親・保育者それぞれへの認知、援助行動、向社会的行動、社会的行動において違いが

見られるかを検討するために、2(性別)×2(年齢クラス)の2要因分散分析を行った。それぞれの平均値と標準偏差をTable2に示した。

母親・保育者それぞれへの認知については、保育者への受容的認知において交互作用が示され($F=6.08, p<.05$)、年中児クラスにおいてのみ、女児の方が男児よりも保育者を受容的であると認知していた。また、保育者への拒否的認知においては性別($F=8.18, p<.01$)と年齢クラス($F=7.63, p<.01$)それぞれの主効果が示され、男児の方が女児よりも、年長児クラスの方が年中児クラスよりも、それぞれ保育者を拒否的であると認知していた。

Table2. 各尺度の平均値と標準偏差

	平均値(標準偏差)			
	[性 別]		[年齢クラス]	
	男児	女児	年長児	年中児
【認知】				
母 親：受容的認知	4.32(1.80)	4.90(1.92)	4.66(1.78)	4.63(2.00)
拒否的認知	2.44(1.73)	2.32(1.66)	2.45(1.57)	2.30(1.81)
保 育 者：受容的認知	3.80(2.04)	5.43(2.28)	4.48(2.03)	4.92(2.61)
拒否的認知	2.52(1.81)	1.33(1.47)	2.41(1.72)	1.27(1.54)
【社会性】				
援助行動	.36(.49)	.55(.51)	.48(.51)	.44(.51)
向社会的行動	25.64(4.72)	27.68(3.83)	28.90(3.38)	24.48(4.11)
社会的行動：				
攻撃行動	15.56(5.53)	11.71(3.28)	12.90(5.33)	14.00(4.15)
撤退行動	10.24(3.10)	11.55(2.73)	10.21(2.81)	11.78(2.93)
主導的行動	13.76(3.37)	11.87(3.47)	14.04(3.57)	11.30(2.92)
対大人行動	14.00(2.53)	13.71(2.57)	14.93(2.81)	12.67(1.52)

幼児の社会性については、向社会的行動において性別($F=4.28, p<.05$)と年齢クラス($F=19.72, p<.001$)それぞれの主効果が示され、女児の方が男児よりも、年長児クラスの方が年中児クラスよりも、それぞれ向社会的行動が高かった。また、社会的行動の攻撃行動において性別の主効果が示され($F=10.34, p<.01$)、男児の方が女児よりも攻撃行動が高かった。撤退行動($F=4.23, p<.05$)と対大人行動($F=12.60, p<.01$)においては年齢クラスの主効果が示され、年中児クラスの方が年長児クラスよりも撤退行動が高く、年長児クラスの方が年中児クラスよりも対大人行動が高かった。主導性においては性別($F=4.73, p<.05$)と年齢クラス($F=10.53, p<.01$)それぞれの主効果が示され、男児の方が女児よりも、年長児クラスの方が年中児クラスよりも、それぞれ主導的行動が高かった。

(2)幼児の母親・保育者への認知と社会性との関連

幼児の母親、保育者それぞれへの認知が援助行動、向社会的行動、社会的行動それぞれとどのように関連するかについて、性別ごとに年齢クラスを制御変数とした偏相関分析を行った。

援助行動については、男児においては母親を拒否的と認知しているほど、援助行動を行うことが示された。

向社会的行動については、男児・女児とも有意な関連は示されなかった。

社会的行動については、男児においては、保育者を拒否的と認知しているほど攻撃行動が高いことが示された。女児においては、母親を受容的と認知しているほど対大人行動が低く、母親を拒否的と認知しているほど対大人行動が高いことが示された。

Table3. 年齢クラスを制御変数とした性別ごとの認知と社会性の偏相関

	援助行動	向社会的行動	社会的行動			
			攻撃	撤退	主導的	対大人
【男児】						
母親：受容的認知	-.22	.16	-.12	-.12	.15	.09
母親：拒否的認知	.45*	.08	.32	-.21	-.05	-.07
保育者：受容的認知	-.38†	-.07	-.19	.18	.15	-.16
保育者：拒否的認知	.35†	.13	.48*	-.16	-.04	.38†
【女児】						
母親：受容的認知	-.02	-.03	-.18	-.27	-.01	-.38*
母親：拒否的認知	.13	-.04	.34†	.31	.08	.47*
保育者：受容的認知	.35†	.10	.27	-.06	.22	-.12
保育者：拒否的認知	-.07	-.18	-.03	.03	-.11	.26

* $p<.05$, † $p<.10$

考 察

本研究では、同一の幼児に対して母親への認知、保育者への認知それぞれを測定し、援助行動、向社会的行動、社会的行動にどのように関連するか検討を行った。

その結果、幼児の母親への認知については幼児の性別、年齢クラスとの関連は示されなかったが、保育者への認知については、受容的認知は年中児クラスにおいて女児の方が男児よりも高いこと、拒否的認知は男児の方が女児よりも、年長児クラスの方が年中児クラスよりも高いことが示された。本研究では、年長児クラス、年中児クラスともそれぞれ 1 クラスを対象としており、担任保育者が異なるため、それぞれの保育者の特性が幼児の認知に影響した可能性が考えられる。しかし、同じ年中児クラスの同一の保育者に対して女児の方が男児よりも保育者を受容的であると認知していたこと、年長児クラスと年中児クラスを併せると男児の方が女児よりも保育者を拒否的であると認知していたことから、幼児の保育者への認知には性差がある可能性が示唆される。本研究で対象となったクラスの担任保育者はどちらも女性だったため、女児にとっては同一視の対象になりやすい女性保育者にポジティブな認知を持ちやすかった可能性も考えられるだろう。今後は、保育者の性別の違いも含め、幼児の保育者への認知の特徴について検討していく必要がある。

幼児の援助行動、向社会的行動、社会的行動といった社会性の発達は、性別や年齢クラスと多くの関連があることが示されたことから、本研究では性別ごとに年齢クラスを制御した上で、幼児の母親・保育者へ

の認知と社会性との関連について検討を行った。その結果、まず男児においては母親を拒否的と認知しているほど援助行動を行うことが示された。先行研究(森下, 1990)では、母親を拒否的であると認知している男児は母親の攻撃行動のモデリングが少ないことが示されており、これは母親から罰せられることに対する自己防衛的な行動である可能性が指摘されている。本研究では母親の行動のモデリングではなく他者に対する援助行動ではあったが、同様に男児は母親からの罰や拒否から自分を守るために他の大人(実験者)に対しても良い子であろうとする行動を示したのかもしれない。さらに本研究では、男児は保育者を拒否的であると認知している場合、攻撃行動が高いことが示された。先行研究(森下, 1985)でも同様に、保育者を拒否的であると認知している男児ほど保育者の攻撃行動のモデリングが多いことが示されているが、本研究ではモデリング以外にも保育者への拒否的認知が男児の日常的な攻撃行動と関連することを示す結果となった。この理由として、男児は女児よりも攻撃行動そのものが高いため、園生活における重要な他者である保育者に拒否されていると認知することは、男児の持っている不安やフラストレーションを出現しやすくするのもかもしれない。男児にとっては、保育者への認知が園での攻撃行動に重要な意味を持っている可能性が考えられる。

一方、女児については、保育者への認知は社会性と関連が見られず、母親への受容的認知が低いこと、拒否的認知が高いこと、といったネガティブ認知の高さが対大人行動を促す可能性が示された。対大人行動と

は大人と接触したり、大人の注意を引こうとしたりする行動であり、園生活での大人とは多くの場合で保育者を指していると考えられる。このことは、母親から拒否されていると認知している女兒は母親との関係を埋め合わせるために保育者を含めた大人に対して親密な行動を取ろうとする、と捉えることもできると考えられる。先行研究(森下, 1990)では、女兒において母親への認知とモデリングとの関連は示されなかったが、本研究の結果から、女兒の母親への認知は園生活での社会的行動に関連する可能性が示唆される。

以上のように、本研究の結果から、幼児自身が母親・保育者との関係をどのように捉えているかといった側面は、幼児の社会性の発達に影響を与える重要な要因である可能性が示唆された。今後は、さらに対象の数を増やし、幼児の認知と様々な社会性の発達との関連について詳細な検討を行っていくことに加え、幼児期に母親や保育者への受容的認知、拒否的認知を形成していく上でどのような要因が関連しているのかについても明らかにしていく必要があるだろう。

引用文献

後浜恭子. 1978. モデルへの依存性と養育態度の認知が幼児の模倣行動におよぼす影響. *心理学研究*, 49, 241-248.

Bandura, A. & Huston, A. C. 1961. Identification as a process of incidental learning. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 63, 311-318.

林 勝造・一谷彊・小嶋秀夫. 1973. *親に対する子どもの認知像の検査法: CCP*

解説 1973 年版. 大成出版牧野書房.

林 勝造・一谷彊・小嶋秀夫. 1987. *親に対する子どもの認知像の検査法: CCP 解説 1987 年版*. 大成出版牧野書房.

岩立京子. 1995. *幼児・児童における向社会的行動の動機づけ*. 風間書房.

小林 真. 1997. 母親のしつけスタイルと幼児の社会的行動との関連. *上田女子短期大学紀要*, 20, 69-77.

樟本千里・山崎晃. 2002. 幼児期における2つの他者感情推論能力と向社会的行動. *日本発達心理学会第13回大会発表論文集*, 297.

森下正康. 1985. 幼児の攻撃行動・愛他行動のモデリング: 教師モデルに関する受容的-拒否的態度. *心理学研究*, 56, 138-145.

森下正康. 1990. 幼児の攻撃行動と向社会的行動のモデリングにおよぼす母子関係の影響. *心理学研究*, 61, 103-110.

柴田利夫. 1993. 幼児における社会的コンピテンスの諸速度間の相互関連性とその個人差. *発達心理学研究*, 4, 60-68.

園田菜摘・北村琴美・遠藤利彦. 2005. 乳幼児期・児童期におけるアタッチメントの広がり連続性. 数井みゆき・遠藤利彦(編), *アタッチメント:生涯にわたる絆*. ミネルヴァ書房, 80-113.

首藤敏元. 1985. 幼児の愛他行動に及ぼす理由づけの効果. *教育心理学研究*, 33, 243-247.

Van IJdendoorn, M. H., Sagi, A., & Lambermon, M. W. E. 1992. The multiple caretaker paradox: Data from Holland and Israel. In R. C. Pianta (Ed.), *Beyond the parent: The role of*

other adults in children's lives. *New Directions for Child Development*, 57, 5-24. Jossey-Bass